

わたしのまちは花の香り満ちるまち 住み続けたいまちの要は市民が主役

時空を超えた開拓魂の系譜

北海道の空の玄関口・新千歳空港と、道都・札幌市のほぼ中間に位置する恵庭市の市街地は、札幌に近い側から、島松駅・恵み野駅・恵庭駅と並ぶJR千歳線の3駅を中心に、それぞれ半径約1kmにわたって開けている。3つのコンパクトな市街地が、沿線に並び、連携しているのだ。

平成27年11月に市制45周年を迎えた恵庭市の、近代以降の本格的なまちづくりは、旧恵庭村（旧島松村）現・島松駅周辺地区と、旧漁村（現・恵庭駅周辺地区が明治39年に合併して成立）に、JR千歳線の前身となる私鉄・北海道鉄道が開通した大正15年、恵庭駅と島松駅が同時に設置されたことが一つの契機となっている。

旧村時代の町割りはその以後、島松市街は鉄道駅を中心に広がり、恵庭市街は、「旧・

旧国道」「旧国道」36号線という道路を中心として広がった。恵庭・島松両駅の中間に位置する、現・恵み野駅周辺地区は、もともと旧島松村の南部地域（旧南島松地区）に当たり、広大な農用地帯だった。

旧南島松地区に恵み野駅が新設されるのは昭和57年だ。契機となったのは、市制施行（昭和45年）から3年後の昭和48年に策定された「恵庭市総合開発計画基本構想」で、この地区に大規模住宅団地建設計画の方針が示されたことにある。そして昭和54年、道内初の第三セクター方式（事業主体は恵庭市・恵庭市振興公社・民間企業で設立した恵庭新都市開発公社）による大規模住宅団地の開発が開始されたことに伴い、昭和57年に恵み野駅が、請願駅として開設された。

恵庭市総合開発計画基本構想が策定された昭和48年は、アジア初の冬季オリンピック・札幌大会（昭和47年）の翌年に当たる。札幌市は冬季オリンピックを契機に、さらなる大都



はらだ ゆたか
原田 裕
恵庭市長

市圏の形成へと拍車を掛けていく。隣接する恵庭市の大規模住宅団地建設計画の決定は、札幌市のベッドタウンとして、今後大きく飛躍するとの予測に基づくものだった。まさに「時代の要請」が生んだ事業計画だった。

それは同時に、合併後も独自の地域性を保持する傾向の強かった旧島松村地区、旧漁村地区の一体化を図る効果を見込んだものでもあったことが、当時を回想する文献には示されている。

「背景の一つには、明治時代に恵庭に入植し、大変なご苦労を重ねながら開拓してく



市民の庭を公開するオープンガーデン



富山県の開拓者を顕彰する開拓碑(恵庭開拓記念公園)



鮭も遡上する恵庭市内の代表的河川・漁川(いざりがわ)

ださった先人たちの出身地が、多岐に渡っていたことなどが影響していたと考えられます」

そう語る原田裕・恵庭市長は、昭和51年に恵庭市役所の職員となり、家業継承のため退職(昭和61年)するまで、ニュータウン(恵み野地区)の基盤が一から作られていく過程を、内側からつぶさに見る機会を持ち続けた。平成7年からは北海道議として、平成21年に市長就任するまでの約14年間、今度は一市民としての主観的視点と道議としての客観的視点を交えつつ、島松駅周辺地区・恵み野駅周辺地区・恵庭駅周辺地区という新旧3つの市街

地が、バランスよく発展してい

く過程を体感してきた。

恵庭市内には2つの開拓記念碑がある。山口県出身の人による開拓団(明治19年)を顕彰する記念碑、富山県出身の人々による開拓団(明治26年入植)を顕彰する記念碑である。その他にも、石川県や福井県などからの移住者も多い。また恵庭市は、寒冷地には不向きとされた米作りの道内発祥の地の一つともされるが、寒冷地(島松川右岸地域)での困難な米作りを、明治初期にけん引したのは、河内国(現・大阪府)出身の中山久蔵という人だった。

原田市長の言葉にあるように、恵庭市はさまざまな土地から来訪した進取の気性あふれる人々による、時空を超えた連携で、文字通

り原野から開拓されてきたのだ。先人たちが築いてきた、その流れは、市制施行時に約3万5000人だった人口が、ほぼ倍増の6万9000人台を維持する現在に至っても、形を変え、続いているといえる。

市民協働で乗り切る人口減少化時代

恵庭市が現在進めつつある、「人口減少化時代の到来という現実から目をそらすことなく、むしろ人口減少時代に特化した知恵と努力によって、さらに住みやすいまち、いつまでも住み続けたいくなるまちを構築していく試み」(原田市長)に、系譜は受け継がれているのだ。次にご紹介するように、その担い手、



まさにガーデンシティ(恵み野地区・商店街)

つまり現代の開拓者魂を継承するのは、地域を心から愛し、恵庭をわが終の棲家と思いつめ、強い協働精神で近年のまちづくりに積極的に関与してきた、またこれから関与しようとしている一般市民の人々である。

恵庭市民の地域愛の強さは、平成27年3月公表の市民意識調査(実施は平成26年末)でも明らかだ。恵庭市が「住みやすい」「どちらかといえば住みやすい」と答えた人は95%。これからも恵庭市に「住み続けたい」「どちらかといえば住み続けたい」とする人は90%に達している。また恵庭市に「住み続けたい」と回答した人々の最も多い理由は「地域への愛着」(63%)だった。次いで「札幌市や空港に近いアクセスの良さ」(61%)、「自然環境の良さ」(47%)が続いた。

恵庭市は「花のまち」「ガーデンングのまち」として広く知られている。「第12回花の観光地づくり大賞」(平成22年)、「第26回緑の環境デザイン賞で最高賞の国土交通大臣賞」(平成27年)の受賞など、花やガーデンング



花のある暮らしの普及が目的の「花と暮らし展」(毎年6月)。恵庭に特化した商品を揃えた「えにわマルシェ」も併催

に関する受賞歴も多い。もともと花卉類の産地として定評のあった恵庭市で、市民が主役の「花いっぱい美しいまちづくり」への取り組みが始まったのは昭和30年代半ばのことだ。

一方、恵み野地区に入居した人の中にもガーデンング愛好者が現れ、その輪が住宅街から商店街、さらに恵庭駅周辺地区や島松駅周辺地区へと波及していった。その効果はやがて観光振興につながり、ひいては地場産業(花卉栽培)にも刺激を与え、その振興につながっていった。

恵庭市の「花のまちづくり」は、自分たちの終の棲家を求めて恵庭市に引っ越してきた人々の地域愛の醸成、観光や地場産業の振興とともに、3駅を中心に展開する市街地の一

体化にも寄与することになったのだ。

「『花のまち恵庭』の好感度の高さは、人口ビジョンを含む『恵庭市総合戦略』、さらにそれを包含する現行の総合計画(第5期、平成28年度)の最重点課題である、人口減少化抑制、移住・定住化促進の要ともなっている」(原田市長)

花のまちづくりの成功体験は市民の協働意欲の向上にも、大きな効果をもたらしている。恵庭市ではこの「市民主体のまちづくり」のベースを、より本格的な協働のまちづくりの機運につなげるべく、平成25年10月に「恵庭市まちづくり基本条例」を公布した。

また、翌平成26年からは、市民協働の芽を深化させるべく、年間ごとにテーマを設定し市長や職員が各地区(8地区)に出向いて、

恵庭市

市 政 ル ポ

(北海道)



「道と川の駅・花ロードえにわ」の敷地内にある恵庭農産物直売所「かのな」

ワークショップ形式で市民と一緒に将来のまちづくりに向けた意見交換・懇談をする「市民の広場」を開始している。

目標は新時代のコンパクトシティ形成

例えば平成27年度は「コンパクトな生活都市」の形成に不可欠な「エコバス」(コミュニティバス)がテーマだった。そして平成28年度のテーマは、北国・恵庭市ならではの「除排雪」である。

「恵庭市は北海道では比較的雪の少ない地域ですが、それでも毎冬4億円ぐらいの予算を使って除排雪しています。従ってこの除排雪をテーマとする市民の広場では、担当職員や除排雪業者の方たちとともに向

いて、恵庭市の除排雪の仕組みや今後の課題などを地域の方たちにざっくりとばらんにお話しし、より無駄のない、合理的な除排雪を実現するべく意見交換をさせていただきました」(原田市長)

そこで市民の広場(各地区で7月開催)では、まず除排雪の仕組みを地域ごとに理解してもらい、住民も自分でできる除排雪はする、雪だしのマナーを守るなど、除排雪を「わが事」として考えてもらう意識づけを行った。その上でワークショップも当日行い、各地区内の具体的な除排雪の課題を浮き彫りにした。その結果を基に、各地区の除排雪の課題が一目で分かる対策マップ(積雪の度合い、除排雪車の必要度、冬の道路事情など、地区ごとに違う除排雪の課題や留意事項などを網羅)を後日作成し、各地区に配布した。

恵庭市ではさらに平成28年4月から、地域(主に町内会)と行政をつなぎ、地域課題を官民で共有すると同時に、課題を解決するため、地域活動に参加・支援する「地域担当職員」を制度化するなど、市民協働体制の強化、深化を着々と進めている。

同様に現在、着々と進められているのが、人口ビジョン(総合戦略)を踏まえた、新たなコンパクトシティの推進だ。前述のように恵庭市は3つの駅を中心に、それぞれ半径約1kmの市街地が3つ並ぶ、いわば3つの核が連繋する独特なコンパクトシティの形を形成してきた。そして昭和50年代半ばに開発が始

まった恵み野駅周辺の地域は、結果的に市内ではいち早く都市化の推進された地域となった。恵み野駅周辺地域にはその後も宅地造成が続く、新たな働き盛りの住民も移り住んできているが、初期のニュータウンを中心に高齢化も同時進行しつつある。



恵庭の冬に除排雪車は不可欠





多岐に渡る恵庭市の子育て支援事業（ブックスタートのフォロー企画・中央図書館）



多世代が集う生涯学習施設「かしわのもり」(体育館も付属)



空中歩廊で恵庭駅と直結し、有料老人ホームも入居する駅前再開発ビル

自衛隊の隊員家族や、市内に数多く立地する専門学校および大学の学生なども含めると、恵庭市の高齢化率は全国平均より下回る。しかし、全体的な高齢化率および人口減少化は、働き盛りの多い恵庭市でも出生率の伸び悩みと併せて、やはり少しずつ進んでいる。

そうした中、恵み野駅周辺地区では開発が遅れていた西口地区の土地区画整理事業が進捗。分譲住宅団地や郊外型複合商業施設の立地が進むなど、新たなにぎわいが創造されつつある(恵み野美里地区)。また恵庭駅周辺地区では、恵庭市の玄関口にふさわしい「まちの顔づくり」を目標に、駅前広場、再開発ビル、公共駐輪場、幹線道路などの整備が着々と進んでいる。すべての事業が完成するのは平成32年度の予定だが、駅の東西を結ぶ自由

通路(空中歩廊)は既に完成しており、やはり新たなにぎわいが創造されつつある。

この恵庭駅周辺の整備事業でひととき注目されるのは、恵庭駅と自由通路(空中歩廊)で結ばれた6階建て再開発ビルへの入居者の構成だ。商業施設、駐車場、公共駐輪場、保育園、医療モール、行政関連スペースとともに有料老人ホームが4〜6階を占めている。

「これは恵庭市が目指す新たなコンパクトシティ化を象徴する施設の一つといえます。高齢化し、独居化せざるを得ない市民の方たちには、駅につながり、医療モールもある便利な建物の上階に暮らしていただく(住宅の住み替え)、同じ建物の一階には、恵庭市の将来を担う子どもさんたちの保育施設もあるのです(原田市長)」

今後は保育園と有料老人ホームとの交流な

ど、多世代交流の新たな形が、ここから生まれてくることが予測される。

恵庭市が目指す究極の将来都市像

多世代交流という観点から、今回取材させていただいた施設の中で非常に印象的だったのが、平成28年9月に開館したばかりの生涯学習施設「かしわのもり」(恵庭市大町)と、平成24年に開館した「黄金ふれあいセンター」(恵庭市黄金南)だ。どちらの施設も、老若男女が集い、趣味や学習を实践する場としてだけでなく、子育て支援機能や児童館機能、図書館機能などを併せ持っている。設計はいずれも北海道大学「都市地域デザイン学研究室」だが、従来の類似施設のような固定壁による隔たりが極力抑えられ、用途によって自由に

恵庭市

市 政 ル ボ

(北海道)



本のまち恵庭の中心施設・中央図書館

使える、ゆるやかな空間構成が素晴らしい。特に回廊がつながっているような形の「かしのもり」では、長さ100mにもなるという図書の間が目を引く。また訪問したのが平日の早い午後だったため、比較的空いていたが、数組の若い母子がリラクセスした風情で静かに過ごしている様子がとても印象的だった。職員さんの話では、放課後や週末ともなると、幼児から高齢者までの多世代が一緒に、楽しく、のんびり過ごしているという。同様の印象を持ったのが図書館本館と、市民活動センター内に設置されている図書館分館だ。恵庭市は「本のまち」としても知られるが、図書館とともに市街地のお店やカフェなどの片隅にも閲覧自由な図書が置かれるなど、市民の図書に対する愛着と親

しみは深い。

「そうした場合は市街地に立地する約50の各種店舗やオフィス、お寺、保育園などにもあり、恵庭市ではそれらの場を連携した『恵庭まちじゅう図書館』を実施しています」（原田市長）

恵庭市ではこのように、多世代の市民が自由にいられる公共の場がまちのそこそこあり、目的がなく行き場のない人にも、行き場をさりげなく提供している。また本を入口にして多種多様な民間の場も、訪れる老若男女に、静かに門戸を開いている。

前出「恵庭市まちづくり基本条例」（前文）には、恵庭市の目指すまちづくりの方向性が、次のように具体的に示されている。

【澄んだ空気・きれいな水・美しい緑・広がる田園風景・

豊かな食資源、そして交通の利便性、きめ細かな子育て支援・行き届いた読書環境・活発な文化スポーツ活動など「恵まれた庭」の住み良い環境の中で「ふるさとに誇りを持つ子どもたちを健やかに育て



縄文時代後期の貴重な出土品が出たカリンバ遺跡（国指定史跡、出土品は恵庭市郷土資料館で展示中）

たい「誰もが健康で安心して暮らしたい」「仲間がいて生きがいのある暮らしをしたい」と願っています。／そのためには、市民と市民がつながり、市民と行政がつながり、それぞれが果たすべき役割と責任を理解して、市民の手で花のまちを創ったように、自分のできることから積極的に取り組む活動を続けることが必要です」

明治初期から先人たちに開拓（創生）され、現代に引き継がれてきた「わがまち」の基盤と将来像がここに明確に示されている。現代の開拓（地域創生）者たる市民の手で創った「花のまち」「本のまち」などの像に、近い将来どのように新たな「顔」が付け加えられるのか、楽しみだ。

（取材・文 遠藤隆／取材日 平成28年11月18日）